

龍潭譚

泉鏡花

青空文庫

ツ
研

躑躅か丘
渡船

鎮守の社
ふるさと

かくれあそび
千呪陀羅尼

おう魔が時

大沼

五位鷺

九

躑躅か丘

日は午ごなり。あらら木ぎのたらたら坂さかに樹きの蔭かげもなし。寺てらの門かど、植木屋うゑぎやの庭にわ、花屋はなやの店みせなど、坂下さしはさを挟さみて町まちの入口いりぐちにはあたれど、のぼるに従したがいて、ただ畑はたばかりとなれり。番小ばんせう屋やめきたるもの小せうだかき処ところに見みゆ。谷やまには菜さいの花はな残りたり。路みちの右左みぎひだり、躑躅つじの花はなの紅くれないなるが、見渡みわたす方かた、見返みかへる方かた、いまを盛さかなりき。ありくにつれて汗あせ少すくしいでぬ。

空そらよく晴はれて一点いっけんの雲うみもなく、風かぜあたたかに野面のづらを吹ふけり。

一人ひとりにては行くことなかれと、優やさしき姉上あねさまのいいたりしを、肯きかで、しのびて来きつ。おもしろきながめかな。山やまの上うへの方かたより一束たきぎの薪たきぎをかつぎたる漢おのこおり来きたれり。眉まゆ太おとく、眼まなこの細こきが、向むさまに顧はちまき巻まきしたる、額ぬかのあたり汗あせになりて、のしのしと近づちかづきつつ、細こき道みちをかたよけてわれを通とおせしが、ふりかえり、

「危あやないぞ危あやないぞ。」

といわずに眈まなじりに皺しわを寄よせてさつさつと行ゆ過ぎぎぬ。

見返ればハヤたらたらさがりに、その肩躑躅の花にかくれて、髮結いたる天窓のみ、やがて山蔭に見えずなりぬ。草がくれの径遠く、小川流るる谷間の畦道を、菅笠冠りたる婦人の、跣足にて鋤をば肩にし、小さき女の兎の手をひきて彼方にゆく背姿ありしが、それも杉の樹立に入りたり。

行く方も躑躅なり。来し方も躑躅なり。山土のいろもあかく見えたる、あまりうつくしさに恐しくなりて、家路に帰らむと思ふ時、わが居たる一株の躑躅のなかより、羽音たかく、虫のつと立ちて頬を掠めしが、かなたに飛びて、およそ五六尺隔てたる処に礫のありたるそのわきにとどまりぬ。羽をふるうさまも見えたり。手をあげて走りかかれれば、ぱつとまた立ちあがりて、おなじ距離五六尺ばかりのところにとまりたり。そのまま小石を拾いあげて狙いうちし、石はそれぬ。虫はくるりと一ツまわりて、また旧のようにぞ居る。追いかくれば迅くもまた遁げぬ。遁ぐるが遠くには去らず、いつもおなじほどのあわいを置きてはキラキラとささやかなる羽ばたきして、鷹揚にその二すじの細き髯を上下にわづくりておし動かすぞいと憎さげなりける。

われは足踏して心いらてり。その居たるあとを踏みにじりて、

「畜生、畜生。」

と眩つぶやきざま、躍こぶしりかかりてハタと打ちし、拳こぶしはいたずらに土によごれぬ。

渠かれは一足先なる方かたに悠々と羽はづくろいす。憎しと思おぼう心を籠こめて瞻みまもりたれば、虫は動かうごずなりたり。つくづく見れば羽は蟻ありの形して、それよりもやや大おおなる、身はただ五彩の色を帯びて青みがちにかがやきたる、うつくしさいわむ方なし。

色彩あり光沢ある虫は毒なりと、姉上の教えたるをふと思おもい出でたれば、打置きてすぐと引返ひっかえせしが、足許あしもとにさきの石の二ツに砕けて落ちたるより俄にわかに心動き、拾ひろいあげて取つて返し、きと毒虫をねらいたり。

このたびはあやまたず、したたかうつて殺しぬ。嬉しく走りつきて石をあわせ、ひたと打うちひしぎて蹴けと飛ばしたる、石は躑躅せきとくのなかをくぐりて小砂利をさそい、ばらばらと谷深くおちゆく音しき。

袂たもとのちり打うちはらいて空を揚げば、日脚ひなめや斜ななめになりぬ。ほかほかとかおあつき日向ひなたに唇くちびるかわきて、眼まなこのふちより頬ほのあたりむず痒かゆきこと限りなかりき。

心着こころけば旧来もとこし方かたにはあらじと思おもう坂道の異なる方にわれはいつかおりかけいたり。丘かたひとつ越えたりけむ、戻る路はまたさきとおなじのぼりになりぬ。見渡せば、見まわせば、赤土の道幅せまく、うねりうねり果はてしなきに、両側つづきの躑躅せきとくの花、遠とほき方かたは前後ひんぎを塞ふさ

ぎて、日かげあかく咲込めたる空のいろの真蒼まさおき下に、たたずイむはわれのみなり。

鎮守の社

坂は急ならず長くもあらねど、一つつく尽ればまたあらたにあらわ顕る。起伏あたかも大波のごとく打た続きて、いつたん坦ならむとも見えざりき。

あまり倦うみたれば、一ツおりのぼる坂の窪くぼみにつく踞いし、手のあきたるまま何ならむ指もて土にかきはじめぬ。さという字も出来たり。くという字も書きたり。曲りたるもの、直すくなるもの、心の趣くままに落書したり。しかなせるあいだにも、頬のあたり先さき刻に毒虫の触れたらむと覚ゆるが、しきりにかゆければ、袖もてひまなく擦こすりぬ。擦りてはまたもの書きなどせる、なかにむつかしき字のひとつ形よく出来たるを、姉に見せばやと思うに、にわか俄にその顔の見とうぞなりたる。

たち立あがりてゆくてを見れば、左右より小枝を組みてあわいも透すかで躑躅咲きたり。日影ひとしお赤うなりまさりたるに、手を見たればたなそこ掌に照りそいぬ。

一文字にかけのぼりて、と見ればおなじ躑躅のだからおりなり。走りおりて走りのぼ

りつ。いつまでかかかてあらむ、こたびこそと思うに違たがいて、道はまた蜿うねれる坂なり。踏心地柔かく小石ひとつあらずなりぬ。

いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顔なつかしく、しばらくも得え堪えずなりたり。

再びかけのぼり、またかけりおりたる時、われしらず泣きていつ。泣きながらひたばしりに走りたれど、なお家ある処に至らず、坂も躑躅も少しもさきに異ことならずして、日の傾くぞ心細き。肩、背のあたり寒うなりぬ。ゆう日あざやかにぱつと茜あかねきして、眼もあやに躑躅の花、ただ紅くれなゐの雪の降積めるかと疑わる。

われは涙の声தாகく、あるほど声を絞すまりて姉をもとめぬ。一たび二たび三たびして、こたえやすくと耳を澄すませば、遙はるかに滝の音聞えたり。どうどうと響くなかに、いと高く冴さえたる声の幽かすかに、

「もういいよ、もういいよ。」

と呼びたる聞えき。こはいとけなき我がなかまの隠れ遊びというものするあい図なることを認め得たる、一声くりかえすと、ハヤきこえずなりしが、ようよう心たしかにその声したる方かたにたどりて、また坂ひとつおりて一つのぼり、こだかき所に立ちて瞰みおるせば、

あまり雑作なしや、堂の瓦屋根、杉の樹立のなかより見えぬ。かくてわれ踏迷いたる紅の雪のなかをばのがれつ。背後には躑躅の花飛び飛びに咲きて、青き草まばらに、やがて堂のうらに達せし時は一株も花のあかきはなくて、たそがれの色、境内の手洗水のあたりを籠めたり。柵結いたる井戸ひとつ、銀杏の古りたる樹あり、そがうしろに人の家の土塀あり。此方は裏木戸のあき地にて、むかいに小さき稲荷の堂あり。石の鳥居あり。木の鳥居あり。この木の鳥居の左の柱には割れめありて太き鉄の輪を嵌めたるさえ、心たしかに覚えある、ここよりはハヤ家に近しと思うに、さきの恐しさは全く忘れ果てつ。ただひとえにゆう日照りそいたるつつじの花の、わが丈よりも高き処、前後左右を咲埋めたるあかき色のあかきがなかに、緑と、紅と、紫と、青、白の光を羽色に帯びたる毒虫のキラキラと飛びたるさまの広き景色のみぞ、画のごとく小さき胸にえがかけける。

かくれあそび

さきにわれ泣きいだして救を姉にもとめしを、渠に認められしぞ幸なる。いうことを肯かて一人いで来しを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそとて笑われなむ。優しき

人のなつかしけれど、顔をあわせて謂いいまけむは口惜くしきに。

嬉たしく喜たばしき思い胸むねにみちては、また急に家に帰かえらむとはおもわず。ひとり境内たたらにノ
みしに、わツという声、笑わらう声、木の蔭かげ、井戸いどの裏うら、堂どうの奥おく、廻廊かいりやうの下したよりして、五ツよ
り八ツまでなる児この五六人あとしき前後あとしきに走り出でたり、こはかくれ遊あそびの一人ひとりが見みいだされた
るものぞとよ。二人ふたり三人みたり走り来きて、わがそこに立たてるを見みつ。皆みな瞳ひとみを集あめしが、

「お遊あそびな、一所いこにお遊あそびな。」とせまりて勸すすめぬ。小家こいえあちこち、このあたりに住すむは、
かたいというものなりとぞ。風俗ふうぞく少すくしく異ちがなれり。児こどもが親おや達の家いへ富ゆみたるも好よき衣着きぬ
たるはあらず、大抵はたし跣はだし足あしなり。三味線さんみせん弾ひきて折か々たわが門かどに來きるもの、溝川どじやうに鱒ますを捕とうるも
の、附木つけぎ、草履わらじなど鬻ひぎに來きるものだちは、皆みなこの児こどもが母ははなり、父ちちなり、祖母そぼろなどな
り。さるものとはともに遊あそぶな、とわが友ともは常いに戒いましめつ。さるに町方まちがたの者ものとしいえば、か
たいなる児こどもも尊たび敬うやまいて、しばらくもともに遊あそばんことを希こいねがうや、親おやしく、優やさしく勉つとめ
てすなれど、不こ断なは此方こなたより遠とほざかりしが、その時は先まにあまり淋さびしくて、友とも欲ほしき念ねん
堪たえがたかりしその心のまだ失うせざると、恐おそしかりしあとの樂たのしきとに、われは拒こまずし
て頷うなずきぬ。

児こどもはさざめき喜よろこびたりき。さてまたかくれあそびを繰くりか返へすとて、拳けんしてさがすもの

を定めしに、われその任にあたりたり。面を蔽えというままにしつ。ひツそとなりて、堂の裏崖をさかさに落つる滝の音どうどうと松杉の梢ゆう風に鳴り渡る。かすかに、

「もう可いよ、もう可いよ。」

と呼ぶ声、袂に響けり。眼をあくればあたり静まり返りて、たそがれの色また一際襲い来れり。大なる樹のすくすくとならべるが朦朧としてうすぐらきなかに隠れむとす。声したる方々と思ふ処には誰も居らず。ここかしこさがしたれど人らしきものあらざりき。

また旧の境内の中央に立ちて、もの淋しく曠しぬ。山の奥にも響くべく凄じき音して堂の扉を鎖す音しつ、鬨としてものも聞えずなりぬ。

親しき友にはあらず。常にうとましき兒どもなれば、かかる機会を得てわれをば苦めむとや企みけむ。身を隠したるまま密に遁げ去りたらむには、探せばとて獲らるべき。益もなきことをとふと思いうかぶに、うちすてて踵をかえしつ。さるにても万一わがみいだすを待ちてあらばいつまでも出でくることが得ざるべし、それもまたはかり難しと、心迷いて、とつ、おいつ、徒に立ちて困ずる折しも、いづくより来りしとも見えず、暗うなりたる境内の、うつくしく掃いたる土のひろびろと灰色なせるに際立ちて、顔の色白く、うつ

くしき人、いつかわが傍かたわらに居て、うつむきざまにわれをば見き。

極めて丈高き女なりし、その手を懐にして肩を垂れたり。優しきこえにて、

「こちらへおいで。こちら。」

といいて前まへに立ちて導きたり。見知りたる女ひとにあらねど、うつくしき顔の笑えみをば含みたる、よき人と思いたれば、怪しまで、隠れたる児のありかを教うるときとりたれば、いそいと従いぬ。

おう魔が時

わが思う処たがに違わず、堂の前を左にめぐりて少しゆきたる突つきあたりに小さき稻荷いなりやしろの社あり。青き旗、白き旗、二三本その前に立ちて、うしろはただちに山の裾すそなる雑樹斜めに生おいて、社の上を蔽おほいたる、その下のおぐらき処、孔あなのごとき空地なるをソとめくばせしき。瞳は水のしたたるばかり斜ななめにわが顔を見て動けるほどに、あきらかにその心ぞ読まれたる。さればいささかもためらわで、つかつかと社の裏をのぞき込む、鼻うつばかり冷たき風あり。落葉、朽葉堆うずたかく水くさき土のにおいしたるのみ、人の氣勢けはいもせで、頸えりもとの冷ひやかな

るに、と胸をつきて見返りたる、またたくまと思うかの女はハヤ見えざりき。いずかたにか去りけむ、暗くなりたり。

身の毛よだちて、思わず啊呀と叫びぬ。

人顔のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず、たそがれの片隅には、怪しきもの居て人を惑わすと、姉上の教えしことあり。

われは茫然として眼を睜りぬ。足ふるいたれば動きもならず、固くなりて立ちすくみたる、左手に坂あり。穴のごとく、その底よりは風の吹き出づると思ふ黒闇々たる坂下より、もののぼるようなれば、ここにあらば捕えられむと恐しく、とここの思慮もなきで社の裏の狭きなかににげ入りつ。眼を塞ぎ、呼吸をころしてひそみたるに、四足のもの歩むけはいして、社の前を横ぎりたり。

われは人心地もあらで見られじとのみひたすら手足を縮めつ。さるにてもさきの女のうつくしかりし顔、優かりし眼を忘れず。ここをわれに教えしを、今にして思えばかくれたる児どものありかにあらず、何等か恐しきものわれを捕えむとするを、ここに潜め、助かるべしとて、導きしにはあらずやなど、はかなきことを考えぬ。しばらくして小提灯の火影あかきが坂下より急ぎのぼりて彼方に走るを見つ。ほどなく引返してわがひそみ

たる社の前に近づきし時は、一人ならず二人三人連立ちて来りし感あり。

あたかもその立留りし折から、別なる登音、また坂をのぼりてさきのもと落合いたり。

「おいおい分らないか。」

「ふしぎだな、なんでもこの辺で見たというものがあるんだが。」

とあとよりいいたるはわが家につかいたる下男の声に似たるに、あわや出でむとせしが、恐しきもののさはたばかりて、おびき出すにやあらむと恐しきは一しお増しぬ。

「もう一度念のためだ、田圃の方でも廻つて見よう、お前も頼む。」

「それでは。」といいて上下にばらばらと分れて行く。

再び寂としたれば、ソと身うごきして、足をのべ、板めに手をかけて眼ばかりと思う顔少し差出だして、外の方をうかがうに、何ごともあらざりければ、やや落着きたり。怪しきものども、何とてやはわれをみいだし得む、愚なる、と冷かに笑いに、思いがけず、誰ならむたまぎる声して、あわてふためき遁ぐるがありき。驚きてまたひそみぬ。

「ちさとや、ちさとや。」と坂下あたり、かなしげにわれを呼ぶは、姉上の声なりき。

大沼

「居ないツて私あどうしよう、爺じいや。」

「根ツから居さつしやらぬことはござりますまいが、日は暮れます。何せい、御心配な
こんでござります。お前様遊びに出します時、帯の結むすびめをとんとたたいてやらつしやれば
好よいに。」

「ああ、いつもはそうして出してやるのだけれど、きようはお前私にかくれてそツと出て
行つたろうではないかねえ。」

「それはハヤ不念ぶねんなこんだ。帯の結めさえ叩いときや、何がそれで姉あねさま様なり、母おふくろさま
様の魂が入るもんだで魔エテめはどうすることもしえないでござす。」

「そうねえ。」ともものかなしげに語らいつつ、社やしろの前をよこぎりたまえり。

走りいですが、あまりおそかりき。

いかなればわれ姉上をまで怪あやしみたる。

悔ゆれど及ばず、かなたなる境内の鳥居のあたりまで追いかけたれど、早やその姿は見
えざりき。

涙ぐみてたたずイむ時、ふと見る銀杏いちようの木のくらき夜の空に、大なる円おおいき影して茂れる下に、
 女の後姿ありてわが眼まなこを遮りたり。

あまりよく似たれば、姉上と呼ぼむとせしが、よしなきものに声かけて、なまじいにわ
 がここにあるを知られむは、拙つたなきわぎなればと思いてやみぬ。

とばかりありて、その姿またかくれ去りつ。見えずなればなおなつかしく、たとえ恐し
 きものなればとて、かりにもわが優しき姉上の姿に化けしたる上は、われを捕えてむごから
 むや。さきなるはさもなく、いま幻に見えたるがまことその人なりけむもわかざるを、
 何とて言ことばはかけざりしと、打泣きしが、かいてもあらず。

あわれさまさまのものの怪しきは、すべてわが眼まなこのいかにかせし作用なるべし、さらず
 ば涙にくもりしや、術すべこそありけれ、かなたなる御手洗みたらしにて清めてみばやと寄りぬ。

煤すすけたる行燈あんどうの横長よこながきが一つ上にかかりて、ほととぎすの画えと句など書いたり、灯を
 ともしたるに、水はよく澄みて、青き苔こけむしたる石鉢いしひちの底もあきらかなり。手に掬むすばむと
 してうつむく時、思いかけず見たるわが顔はそもそもいかなるものぞ。覚えず叫こゑびしが心
 を籠こめて、氣を鎮めて、両まなこの眼を拭ぬぐい拭ぬぐい、水に臨む。

われにもあらでまたとは見るに忍びぬを、いかでわれかかるべき、必ず心の迷えるなら

む、今こそ、今こそとわななきながら見直したる、肩をとらえて声ふるわし、

「お、お、千里。ええも、お前は。」と姉上ののたまうに、縫すがりつかまくみかえりたる、わが顔を見たまいしが、

「あれ！」

といて一足すさりて、

「違つてたよ、坊や。」とのみいずてに衝つと馳はせ去りたまえり。

怪しき神のさまざまのことしてなぶるわと、あまりのことに腹立たしく、あしずりして泣きに泣きつつ、ひたばしりに追いかけぬ。捕えて何をかなさむとせし、そはわれ知らず。ひたすらものの口惜しければ、とにかくもならばとてなむ。

坂もおりたり、のぼりたり、大路おおみちと覚しき町にも出でたり、暗こみちたどき径も辿りたり、野もよこぎりぬ。畦あぜも越えぬ。あとをも見ずて駈かけたりし。

道いかばかりなりけむ、漫々たる水面やみのなかに銀河のごとく横よこたわりて、黒き、恐しき森四方をかこめる、大沼とも覚しきが、前ゆくて途を塞ふさぎぐと覚ゆる蘆あしの葉の繁よこたきがなかにわが身体からだ倒れたる、あとは知らず。

五位鷺

眼のふち清々^{すがすが}しく、涼しき薰^{かおり}つよく薰ると心着く、身は柔かき蒲団^{ふとん}の上に臥^ふしたり。
 やや枕をもたげて見る、竹縁^{ちくえん}の障子あけ放して、庭つづぎに向いなる山^{やま}懐^{ふところ}に、緑の
 草の、ぬれ色青く生茂^{おいしげ}りつ。その半腹にかかりある巖^{いわかど}角^{こけ}の苔^{こけ}のなめらかなるに、一挺^{ちよう}
 はだか蠟^{ろう}に灯^{ほかけ}ともしたる灯影^{とうかげ}すずしく、笕^{かけひ}の水むくむくと湧^わきて玉ちるあたりに盥^{たらひ}を据え
 て、うつくしく髪結^{むと}うたる女の、身に一糸もかけで、むこうぎまにひたりていたり。
 笕の水はそのたらいに落ちて、溢^{あふ}れにあふれて、地の窪^{くぼ}みに流るる音しつ。

蠟の灯は吹くとなき山おろしにあかくなり、くろうなりて、ちらちらと眼に映ずる雪な
 す膚白^{はだえ}かりき。

わが寝返る音に、ふと此方^{こなた}を見返り、それと頷^{うなず}く状^{さま}にて、片手をふちにかけつつ片足を
 立てて盥^{たらひ}のそとにいだせる時、颯^さと音して、鳥よりは小さき鳥の真白^{ましろ}きがひらひらと舞い
 おりて、うつくしき人の脛^{はぎ}のあたりをかすめつ。そのままおそれげものう翼を休めたるに、
 ざぶりと水をあびせざま莞爾^{にっこ}とあでやかに笑うてたちぬ。手早く衣^{きぬ}もてその胸をば蔽^{おほ}えり。
 鳥はおどろきてはたはたと飛去りぬ。

夜の色は極めてくらし、蟬を取りたるうつくしき人の姿きやかに、庭下駄重く引く音しつ。ゆるやかに縁の端に腰をおろすとともに、手をつきそらして振向きざま、わがかおをば見つ。

「気分は癒つたかい、坊や。」

といて頭を傾けぬ。ちかまさりせる面だけかく、眉あざやかに、瞳すずしく、鼻やや高く、唇の紅なる、額つき頬のあたり臍たけたり。こはかねてわがよしと思ひ詰たる雛のおもかげによく似たれば貴き人ぞと見き。年は姉上よりたけたまえり。知人にはあらざれど、はじめで逢いし方とは思わず、さりや、誰にかあるらむとつくづくみまもりぬ。

またほほえみたまいて、

「お前あれは斑猫といつて大変な毒虫なの。もう可いね、まるでかわつたようにうつくしくなった、あれでは姉様が見違えるのも無理はないのなもの。」

われもさあらむと思わざりしにもあらざりき。いまはたしかにそれよと疑わずなりて、のたまうままだに頷きつ。あたりのめずらしければ起きむとする夜着の肩、ながく柔かにおさえたまえり。

「じつとしておいで、あんばいがわるいのだから、落着いて、ね、気をしずめるのだよ、

可いかい。」

われはさからわで、ただ眼をもて答えぬ。

「どれ。」といて立つたる折、のしのしと道芝を踏む音して、つづれをまとうたる老夫の、顔の色いと赤きが縁近う入り来つ。

「はい、これはお見さまがござらつせえたの、可愛いお見じゃ、お前様も嬉しかろ。ははは、どりや、またいつものを頂きましょか。」

腰をななめにうつむきて、ひつたりとかの筧に顔をあて、口をおしつけてごっごっごっごつとたてつづけにのみたるが、ふツといきを吹きて空を仰ぎぬ。

「やれやれ甘いことかな。はい、参ります。」

と踵を返すを、此方より呼びたまひぬ。

「じいや、御苦労だが。また来ておくれ、この児を返さねばならぬから。」

「あいあい。」

と答えて去る。山風颯とおろして、かの白き鳥また翔ちおりつ。黒き盪のうちに乗りて羽づくろいして静まりぬ。

「もう、風邪を引かないように寝させてあげよう、どれそんなら私も。」とて静に雨戸を

ひきたまいき。

九ツ餅

やがて添そいぶし臥したまいし、さきに水を浴びたまいし故にや、わが膚はだおりおり慄りつぜん然たりしが何の心ものうひしと取とりすが継りまいらせぬ。あとをあとというに、おさな物語二ツ三ツ聞かせたまいつ。やがて、

「一ツ餅くだま、坊や、二ツ餅といえるかい。」

「二ツ餅。」

「三ツ餅、四ツ餅といって御覧。」

「四ツ餅。」

「五ツ餅。そのあとは。」

「六ツ餅。」

「そうそう七ツ餅。」

「八ツ餅。」

「九ツ罇——ここはね、九ツ罇という処なの。さあもうおとなにして寝るんです。」

背に手をかけ引寄せて、玉のごときその乳房をふくませたまいぬ。露あらわに白き襟、肩のあたり鬢びんのおくれ毛はらはらとぞみだれたる、かかるさまは、わが姉上とは太いたく違えり。乳をのまむというを姉上は許したまわず。

ふところをかいさぐれば常に叱りたまうなり。母上みまかりたまいてよりこのかた三年みとせを経つ。乳ちの味は忘れざりしかど、いまふくめられたるはそれには似にざりき。垂すいぎよく玉みとせの乳房ただ淡雪のごとく含むと舌にきえて触るるものなく、すずしき唾つばのみぞあふれいでたる。

軽く背せなをさすられて、われ現うつになる時、屋の棟、天井の上と覚し、凄すさまじき音してしばらくは鳴りも止やまず。ここにつむじ風吹くと柱動く恐おそしさに、わななき取とりつくを抱きしめつつ、

「あれ、お客があるんだから、もう今夜は堪忍しておくれよ、いけません。」

とキとのたまえば、やがてぞ静まりける。

「恐こわくはないよ。鼠ねずみだもの。」

とある、さりげなきも、われはなおその響ひびきのうちにももの叫びたる声せしが耳に残りて

ふるえたり。

うつくしき人はなかばのりいでたまいて、とある蔭絵まきえものの手箱てすばのなかより、一口ひとくちの
守まもり刀がたなを取り出しつつ鞆さやながら引ひきそばめ、雄々おおしき声こゑにて、

「何が来てももう恐くはない、安心してお寝よ。」とのたまう、たのもしき状さまよと思ひて
ひたとその胸にわが顔をつけたるが、ふと眼をさましぬ。残あり燈あけ暗く床柱とこばしらの黒うつややか
にひかるあたり薄き紫の色籠こめて、香こうの薫かおり残りたり。枕まくらをはずして顔をあげつ。顔に顔を
もたせてゆるく閉とじたまいたる眼の睫毛まつげかぞうるばかり、すやすやと寝入りていたまいぬ。
ものいわむとおもう心おかれて、しばし瞻みまもりしが、淋しみしさにたえねばひそかにその唇に指
さきをふれてみぬ。指はそれで唇には届かでない、あまりよくねむりたまえり。鼻をやつ
ままむ眼をやおさむとまたつくづくと打うちまもりぬ。ふとその鼻頭はなびきをねらいて手をふれし
に空くうを捻ひねりて、うつくしき人は雛ひなのごとく顔の筋ひとつゆるみもせざりき。またその眼の
ふちをおしたれど水晶すいせいのなかなるものの形を取らむとするよう、わが顔はその顔におくれげの
はしに頬をなでらるるまで近々とありながら、いかにしても指さきはその顔に届かざるに、
はては心いれて、乳ちの下おもてに面おもてをふせて、強く額おもておしたるに、顔にはただあたたかき霞
のまとうとばかり、のどかにふわふわとさわりしが、薄うす葉よう一重ひとえの支さうるなく着けたる額

はつと下に落ち沈むを、心着けば、うつくしき人の胸は、もとのごとく傍かたわらにあおむきいて、わが鼻は、いたずらにおのが膚はだにぬくまりたる、柔き蒲団うもに埋れて、おかし。

渡船

夢ゆめまぼろし 幻

ともわかぬに、心をしずめ、眼をさだめて見たる、片手はわれに枕させたまいし元のまま柔かに力なげに蒲団のうえに垂れたまえり。

片手をば胸にあてて、いと白くたおやかなる五指をひらきて黄金の目貫めぬきキラキラとうつくしき鞆さやぬりの塗の輝きたる小さき守刀をしかと持つともなく乳ちのあたりに落して据えたる、鼻たかき顔のあおむきたる、唇のものいうごとき、閉じたる眼のほほ笑むごとき、髪かみのさらさらしたる、枕にみだれかかりたる、それも違たがわぬに、胸に剣つるぎをさえのせたまいたれば、亡き母上のその時のさまに紛まがうべくも見えずなむ、コハこの君もみまかりしよとおもいまわしさに、はや取除とりのけなむと、胸なるその守刀に手をかけて、つと引く、せつぱゆるみて、青き光眼まなこを射たるほどこそあれ、いかなるはずみにか血汐ちしおさとほとぼしりぬ。眼もくれたり。したしたとながれにじむをあなやと両こぶしの拳もてしかとおさえたれど、留とどまらずで、

とうとうと音するばかりぞ淋漓りんりとしてながれつたえる、血汐のくれない衣きぬをそめつ。うつくしき人は寂せきとして石像のごとく静しずかなる鳩みずおち尾おちのしたよりしてやがて半身をひたし尽しぬ。おさえたるわが手には血の色つかぬに、燈ともにすかす指のなかの紅くれなゐなるは、人の血の染そみたる色にはあらず、訝いぶかしく撫なで試たなむる掌てのひらのその血汐にはぬれもこそせね、こころづきて見定むれば、かいやりし夜のものあらわになりて、すずしの絹をすきて見ゆるその膚はだにまたいたまいし紅の色なりける。いまはわれにもあらで声高に、母上、母上と呼びたれど、叫びたれど、ゆり動かし、おしうごかししたりしが、効かゐなくてなむ、ひた泣きに泣く泣くいつのまにか寝おほたりと覺し。顔あたたかに胸をおさるる心地に眼覚めぬ。空青く晴れて日影まばゆく、木も草もてらてらと暑きほどなり。

われはハヤゆうべ見し顔のあかき老夫おじの背せなに負われて、とある山路を行ゆくなりけり。うしろよりはかのうつくしき人したが来ましぬ。

さてはあつらえたまいしごとく家に送りたまうならむと推おしはかるのみ、わが胸うちの中はすべて見すかすばかり知りたまうようなれば、わかれの惜しきも、ことのいぶかしきも、取出でていわむは益やくなし。教うべきことならむには、彼方かなたより先んじてうちいでこそしたまうべけれ。

家に帰るべきわが運ならば、強いて止まらむと乞いたりとて何かせん、さるべきいわれあればこそ、と大人しゆう、ものもいわでぞ行く。

断崖だんがいの左右さゆうに聳そびえて、点滴てんていする処ところありき。雑草ざくそう高たかき径けいありき。松まつ 柏かしわのなかを行ゆく処ところもありき。きき知らぬ鳥とりうたえり。褐色こくせきなる獸けものありて、おりおり叢くさむらに躍なり入りたり。ふみわくる道みちにもあらざりしかど、去年こぞの落葉らくえつ道みちを埋うづみて、人多おほくく通とほう所ところとしも見えざりき。

おじは一挺ちようおのの斧おのを腰こしにしたり。れいによりてのしのしとあゆみながら、茨いばらなど生いいしげりて、衣きぬの袖そでをさえぎるにあえば、すかさかと切きつて払はいて、うつくしき人ひとを通とほし参まらず。されば山路やまみちのなやみなく、高たかき塗ぬり下げ駄たの見みえがくれに長ながき裾すそさばきながら来きたまいつ。

かくて大沼おほぬまの岸きしに臨まみたり。水みづは漫まん々たんたんとして藍らんを湛たえ、まばゆき日ひのかけもここの森もりにはささで、水面すいめんをわたる風寒かぜく、颯さつ々さつとして声こゑあり。おじはここに来てソとわれをおろしつ。はしり寄よれば手てを取りて立ちながら肩かたを抱いだきたまう、衣きぬの袖そで左右さゆうより長ながくわが肩かたにかかりぬ。

蘆間あしまの小舟おふねの纜ともづなを解ときて、老夫おとしはわれをかかえて乗のせたり。一緒いっしょならではと、しばしむずかりたれど、めまいのすればとて乗のりたまわず、さらばとのたまうはしに棹さおを立てぬ。

船は出でつ。わつと泣きて立上りしがよろめきてしりに倒れぬ。舟というものにははじめて乗りたり。水を切るごとに眼くるめくや、背後うしろに居たまえりとおもう人の大なる環わにまわりて前途ゆくてなる汀みぎわに居たまいき。いかにして渡し越したまいつらむと思ふときハヤ左手ゆんでなる汀に見えき。見る見る右手めてなる汀にまわりて、やがて旧もとのうしろに立ちたまいつ。箕みの形したる大なる沼おおいは、汀の蘆と、松の木と、建札と、その傍かたわらなるうつくしき人ともろともおもむに緩き環を描いて廻転し、はじめは徐ろにまわりしが、あとあと急になり、疾はやくなりつ、くるくるくと次第にこまかくまわるまわる、わが顔と一尺ばかりへだたりたる、まぢかき処に松の木にすがりて見えたまえる、とばかりありて眼の前まへにうつくしき顔の藤つとうたけたるが莞爾にっことあでやかに笑みたまいきが、そののちは見えざりき。蘆は繁く丈よりも高き汀に、船はとんとつきあたりぬ。

ふるさと

おじはわれを扶たすけて船より出だしつ。またその背せなを向けたり。

「泣くでねえ泣くでねえ。もうじきに坊ツさまの家うちじゃ。」と慰めぬ。かなしきはそれに

はあらねど、いうもかいなくてただ泣きたりしが、しだいに身のつかれを感じて、手も足も綿のごとくうちかけらるるよう肩に負われて、顔を垂れてぞともなわれし。見覚えある板塀のあたりに来て、日のややくれかかる時、老夫はわれを抱き下して、溝のふちに立たせ、ほくほく打えみつつ、慇懃に会釈したり。

「おとなにしきつしやりませ。はい。」

といわずに何地ゆくらむ。別れはそれにも惜しかりしが、あと追うべき力もなくて見おくり果てつ。指す方もあらでありくともなく歩をうつすに、頭ふらふらと足の重たくて行悩む、前に行くも、後ろに帰るも皆見知越のものなれど、誰も取りあわむとはせで往きつ来りつす。さるにてもなおものありげにわが顔をみつつ行くが、冷かに嘲るがごとく憎さげなるぞ腹立しき。おもしろからぬ町ぞとばかり、足はわれ知らず向直りて、とぼとぼとまた山ある方にあるき出しぬ。

けたたましき登音して驚掴に襟を掴むものあり。あなやと振返ればわが家の後見せる奈四郎といえる力逞ましき叔父の、凄まじき気色して、

「つままれぬ、どこをほつつく。」と喚きざま、引立てたり。また庭に引出して水をやあびせられむかと、泣叫びてふりもぎるに、おさえたる手をゆるべず、

「しつかりしろ。やい。」

とめくるめくばかり背を拍ちて宙につるしながら、走りて家に帰りつ。立騒ぐ召つかいどもを叱りつも細引を持って来さして、しかと両手をゆわえあえず奥まりたる三畳の暗き一室に引立てゆきてそのまま柱に縛めたり。近く寄れ、喰さきなむと思うのみ、齒がみして睨まえたる、眼の色こそ怪しくなりたれ、逆つりたる眦は憑きもののわざよとて、寄りたかりて口々にののしるぞ無念なりける。

おもての方さざめきて、いづくにか行きおれる姉上帰りましつと覚し、襖いくつかぱたぱたと音してハヤここに来たまいつ。叔父は室の外にさえぎり迎えて、

「ま、やっと取返したが、繩を解いてはならんぞ。もう眼が血走っていて、すぎがあると駈け出すじや。魔どのがそれしよびくでの。」

と戒めたり。いうことよくわが心を得たるよ、しかり、隙だにあらむにはいかでかここにとどまるべき。

「あ。」とばかりにいらえて姉上はまるび入りて、ひしと取着きたまいぬ。ものはいわでさめざめとぞ泣きたまえる、おん情手にこもりて抱かれたるわが胸絞らるるようなりき。

姉上の膝に臥したるあいだに、医師来りてわが脈をうかがいなどしつ。叔父は医師とと

もに彼方あなたに去りぬ。

「ちさや、どうぞ気をたしかにもつておくれ。もう姉様ねえさんはどうしようね。お前、私だよ。姉さんだよ。ね、わかるだろう、私だよ。」

といきつくづくじつとわが顔を見まもりたまう、涙痕るいこんしたたるばかりなり。

その心の安んずるよう、強いて顔つくりてニツコと笑うて見せぬ。

「おお、薄気味が悪いねえ。」

と傍かたわらにありたる奈四郎の妻なる人呟つぶやきて身ぶるいしき。

やがてまた人々われを取巻きてありしことも責むるがごとくに問いぬ。くわしく語り疑うたがいを解かむとおもうに、おさなき口の順序正しく語るを得むや、根問ねもんい、葉問はもんいするに一々説明とぎあかさむに、しかもわれあまりに疲れたり。うつつ心に何をかいいたる。

ようやくいましめはゆるされたれど、なお心の狂いたるものとしてわれをあしらいぬ。いうこと信ぜられず、すること皆人の疑うたがを増すをいかにせむ。ひしと取籠とりこめて庭にわにも出さいで日を過しぬ。血色けつしきわるくなりて瘦やせもしつとて、姉上のきづかいたまい、後見うしろみの叔父おじ夫婦夫婦にはいとせめて秘かくしつと、そとゆうぐれを忍びて、おもての景色見せたまいしに、門か辺べにありたる多くの児こども我が姿を見ると、一斉に、アレさらわれものの、気狂きちがいの、狐

つきを見よやという、砂利、小砂利をつかみて投げつくるは不断親しかりし朋達ともだちなり。

姉上は袖もてわれを庇かばいながら顔を赤うして遁にげ入りたまいつ。人目なき処にわれを引据えつと見るまに取つて伏せて、打ちたまぬ。

悲しくなりて泣出せしに、あわただしく背せなをばさすりて、

「堪忍しておくれよ、よ、こんなかわいいそうなものを。」

といいかけて、

「私あもう気でも違いたいよ。」としみじみと搔かきくど口説きたまいたり。いつのわれにはかわらじを、何とてきはあやまるや、世にただ一人なつかしき姉上までわが顔を見るごとに、氣を確たしかに、心を鎮めよ、と涙ながらいわるるにぞ、さてはいかにしてか、心の狂いしにはあらずやとわれとわが身を危ぶむようそのたびになりまさりて、果はてはまことにものくるわしくもなりもてゆくなる。

たとえば怪しき糸の十重とえはたえ二十重たえにわが身をまとう心地しつ。しだいしだいに暗きなかに奥深くおちいりてゆく思おもいあり。それをば刈ひ払い、遁のがれ出でむとするにその術すべなく、すること、なすこと、人見て必ず、眉ひそを顰あざめ、嘲あざけり、笑い、卑いやめ、罵ののしり、はた悲かなみ憂いなどする

にぞ、気あがり、心激し、ただじれにじれて、すべてのもの皆われをはらだたしむ。

口惜しく腹立たしきまま身の周囲まわりはことごとく敵かたきぞと思わるる。町も、家も、樹も、鳥と籠りかごも、はたそれ何等のものぞ、姉とてまことの姉なりや、さきには一たびわれを見てその弟を忘れしことあり。塵ちり一つとしてわが眼に入るは、すべてものの化けしたるにて、恐しきあやしき神のわれを悩まさむとて現じたるものならむ。さればぞ姉がわが快復ことばを祈る言もわれに心を狂わすよう、わざとさはいうならむと、一たびおもいては堪うべからず、力あらば恣ほしにもかくもせばやせよかし、近づかば喰いさきくれむ、蹴飛ばしやらむ、搔かきむしらむ、透すきあらばとびいでて、九ツこたま餅とおしえたる、とうときうつくしきかのひとの許もとに遁げ去らむと、胸の湧わきたつほどこそあれ、ふたたび暗室にいましめられぬ。

千呪陀羅尼

毒ありと疑えばものも食わず、薬もいかでか飲まむ、うつくしき顔したりとて、優しきことをいいたりとて、いつわりの姉にはわれことばもかけじ。眼にふれて見ゆるものといえば、たけりくるい、罵ののり叫びてあれたりしが、ついには声も出でず、身も動かず、わ

れ人をわきまえず心地死ぬべくなれりしを、うつらうつら昇きあげられて高き石壇をのぼり、大なる門を入りて、赤土の色きれいに掃きたる一条の道長き、右左、石燈籠と石榴の樹の小さきと、おなじほどの距離にかわるがわる続きたるを行きて、香の薫しみつきたる太き円柱の際に寺の本堂に据えられつ、ト思ふ耳のはたに竹を破る響きこえて、僧ども五三人一斉に声を揃え、高らかに誦する声耳を聳するばかり喧ましき堪うべからず、禿顛ならび居る木のはしの法師ばら、何をかすると、拳をあげて一人の天窗をうたんとせしに、一幅の青き光颯と窓を射て、水晶の念珠瞳をかすめ、ハツシと胸をうちたるに、ひるみて踞まる時、若僧円柱をいざり出でつつ、つい居て、サラサラと金欄の帳を絞る、燦爛たる御廚子のなかに尊き像こそ拝まれたれ。一段高まる経の声、トタンにはたたがみ天地に鳴りぬ。

端嚴微妙のおんかおぼせ、雲の袖、霞の袴ちらちらと璣珞をかけたまいたる、玉なす胸に織手を添えて、ひたと、おさなごを抱きたまえるが、仰ぐ仰ぐ瞳うごきて、ほえみたまうと、見たる時、やさしき手のさき肩にかかりて、姉上は念じたまえり。

滝やこの堂にかかるかと、折しも雨の降りしきりつ。渦いて寄する風の音、遠き方より呻り来て、どつと満山に打あたる。

本堂 青 光あおびかりして、はたたがみ堂の空をまろびゆくに、たまぎりつつ、今は姉上を頼ま
 でやは、あなやと膝にはいあがりて、ひしとその胸を抱いだきたれば、かかるものをふりすて
 むとはしたまわで、あたたかき腕かひなはわが背せなにて組合わされたり。さるにや気も心もよわよ
 わとなりもてゆく、ものを見る明かに、耳の鳴るがやみて、恐しき吹降りのなかに陀羅尼だらに
 を呪じゆする聖の声々さわやかに聞きとられつ。あわれに心細くもの凄すこきに、身の置おきて処ころあ
 らずなりぬ。からだひとつ消えよかしと両手を肩に縋すがりながら顔もてその胸を押しわけた
 れば、襟をば搔きひらきたまいつつ、乳ちの下にわがつむり押入れて、両袖を打うちかさねて深
 くわが背せなを蔽おほいたまえり。御みほとけ 仏ぶつのそのおさなごを抱いだきたまえるもかくこそと嬉うれしきに、
 おちいて、心地すがすがしく胸のうち安く平らになりぬ。やがてぞ呪のろもはてたる。雷らいの音
 も遠とほざかる。わが背をしかと抱いだきたまえる姉上かひなの腕かひなもゆるみたれば、ソとその懐なごより顔を
 いだしてこわごわその顔をば見上げつ。うつくしさはそれにもかからでなむ、いたくもや
 つれたまえりけり。雨風のなおはげしく外おもてをうかがうことだにならざる、静まるを待てば
 夜もすがら暴通あれしつ。家に帰るべくもあらねば姉上は通夜したまいぬ。その一夜の風雨に
 て、くるま山の山中、俗に九ツ筈ふちといいたる谷、あけがたに杣そまのみいだしたるが、たちま
 ち淵ふちになりぬという。

里の者、町の人皆挙りて見にゆく。日を経てわれも姉上とともに来り見き。その日一天うららかに空の色も水の色も青く澄みて、軟風おもむろに小波わたる淵の上には、塵一葉の浮べるあらで、白き鳥の翼広きがゆたかに藍碧なる水面を横ぎりて舞えり。すさまじき暴風雨なりしかな。この谷もと葉研のごとき形したりきとぞ。

幾株となき松柏の根こそぎになりて谷間に吹倒されしに山腹の土落ちたまりて、底をながるる谷川をせきとめたる、おのずからなる堤防をなして、凄まじき水をば湛えつ。一たびこのところ決潰せむか、城の端の町は水底の都となるべしと、人々の恐れまどいて、怠らず土を装り石を伏せて堅き堤防を築きしが、あたかも今の関屋少将の夫人姉上十七の時なれば、年つもりて、嫩なりし常磐木もハヤ丈のびつ。草生い、苔むして、いにしえよりかかりけむと思ひ紛うばかりなり。

あわれ礫を投ずる事なかれ、うつくしき人の夢や驚かさむと、血気なる友のいたずらを叱り留めつ。年若く面清き海軍の少尉候補生は、薄暮暗碧を湛えたる淵に臨みて肅然とせり。

明治二十九（一八九六）年十一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成3」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第三卷」岩波書店

1941（昭和16）年12月

初出：「文芸倶楽部」

1896（明治29）年11月

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

龍潭譚

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>